1963年10月14日第三種郵便認可
第54巻4号　通巻568号
（季刊第1号）
2015年4月1日発行
ISSN 1342-5463

Quarterly journal " The World of Music "

音楽の世界

音楽家がつくる芸術・社会のための季刊誌

2015年
春号

特集

第一特集《助川敏弥／中島洋一　新旧編集長対談
戦争・社会・音楽・人生を語る》

第二特集《私の今年の研究テーマ》
深沢亮子／北川暁子／安田謙一郎／戸引小夜子／浜尾夕美／北條直彦／高橋通／高橋雅光／川島素晴／橘川琢／小西徹郎／西山淑子

グラビア 第2回 邦楽部会 コンサート
論壇 音楽とことば　助川敏弥
コンサート・レポート 第2回 邦楽部会コンサート
コンサート・レポート 第7回フランス歌曲研究コンサート
桜　flow ～after snow～　前川久美子
クラシックよもやま話（1）　宮本英世
音楽随想（1）　板倉重雄
我が音楽人生（1）　久住祐実男
音楽を通して仕事を生み出す（1）　小西徹郎
電子楽器レポート・連載
ハイブリッドオーケストラ発展３０年の歩み(24)　阿方俊
花鏡響想録（1）　橘川琢
時評 日常が転覆した日～オウム地下鉄サリン事件～　小西徹郎
未来レポート特別編：ロボタンの墓　夢音見太郎
特別寄稿 対談「3.11からの心の再生、そして残すもの」
橘川琢／小西徹郎
◆2015年 日本音楽舞踊会議会員名簿◆

Since 1962
日本音楽舞踊会議
The Conference of Music and Dance Japan

電子楽器レポート 連載-23

ハイブリッドオーケストラ発展３０年の歩み - １

研究：阿方　俊

かつてはめずらしかったハイブリッドオーケストラは、今やオペラやピアノコンチェルトなどでよく用いられるようになり、普遍化しつつある。

ハイブリッドオーケストラの発端は、30 年前に日本楽器製造株式会社（現在のヤマハ）のバックアップで設立された全日電研[注-1]のシンポジウム「研究コンサート」にその芽を見ることができる。このコンサートで紹介されたハイブリッドオーケストラは、エレクトーンシティ渋谷の前身であるヤマハ電子楽器東京分室が楽器貸出しや練習場所の提供などを積極的に行い、その発展に寄与し現在につながる。

ここでは、30 年のハイブリッドオーケストラ史の中でその後の発展に影響を与えたものの中から以下の 10 のコンサートや公演を選びその特長と流れを見てみたい。

＜話題性のあったハイブリッドオーケストラ＞

No.	とき／ところ／主催者	曲目	演奏者(ソリストの一部を割愛)
1	1986 年 ヤマハホール 全日電研「研究コンサート」	H.オシェック 「ラプソディ」	EO：森下絹代　ピアノ：藤原嘉文　Cel：岩井雅音　Cl:星野正　Perc：目黒一則
2	1987 年 ヤマハホール 全日電研「研究コンサート」	ヴェルディ 「オペラ・アリア」	指揮：河地良智　EO：西村則子　赤塚博美、大竹くみ、柴田薫、打楽器奏者
3	1990 年 新宿モーツァルトサロン　東京室内歌劇場	ペルゴレージ 「奥様女中」	指揮：金井敬　EO：海津幸子　弦楽合奏：北川靖子、鈴岡淳子、千本博愛
4	1990 年 こまばエミナース 全日電研「研究コンサート」	伊福部昭 「マリンバ協奏曲」	指揮：L.リヴィングストン　マリンバ：安倍佳子　EO:森下絹代　Perc:上野信一他
5	1992 年 大阪国際会議場ホール ヴェルディ音楽院、関西歌劇団	プッチーニ 「修道女アンジェリカ」	指揮：E.マッツォーラ　EO：赤塚博美、海津幸子、柴田薫　弦打：エウフォニカ
6	1993 年 水戸芸術館 水戸芸術館	モーツァルト 「魔笛」	指揮：北村協一 EO:小林由佳、河崎秋彦 Fl：柴草幹男　Perc：尾花章子
7	1995 年　エレクトーンシティ渋谷　東京室内歌劇場	芥川也寸志 「ヒロシマのオルフェ」	指揮：若杉弘　エレクトーン：平部やよい、渡辺睦樹　Perc：2 名
8	1996 年 熊本県立劇場演劇 H. 熊本音楽短大 EO.コンサート	マイスタージンガー「前奏曲」	指揮：出田敬三　EO：田口由紀　濱乃上志貴　管打：熊本音短大管弦楽団
9	2002 年 昭和音大 D-101 ピアノコンチェルトコンサート	サンサーンス 「P.協奏曲第２番」	指揮：野口剛夫 EO：電子オルガン副科学生５名、管打楽器有志：15 名
10	2003 年 エレクトーンシティ渋谷 昭和音大 EO.第１回定演	ベートーヴェン 「田園」より	指揮：野口剛夫　EO：遠藤由佳、片桐美優、平塚美奈、井田恵ほか　管：有志

No.１と２は、全日電研のシンポジウム「研究コンサート」で紹介されたハイブリッドオーケストラで、そのはしりのひとつと言えるものである。筆者の知る限りで最も古いものは、研究コンサートで共演を願ったウィリアム・ウー氏（以下、敬称略）が、自身の声楽研究所でエレクトーン、シンセサイザーとパーカッションを用いて、1985 年頃、金沢と台湾で「蝶々夫人」を上演したのが最初だと思

われる。

このNo.2のハイブリッドオーケストラに関する音楽面で特記されることに、エレクトーン奏者がオーケストラスコアで演奏をしたことが挙げられる。以後、スコアリーディング奏法の有用性が認知されてくるにつけ、音大電子オルガン科のアンサンブル授業で、スコアリーディング奏法をその大学の売りとしているところも現れてきたが、これも現在ではめずらしいものではなくなりつつある。

このコンサートがきっかけで、東京室内歌劇場に関係の深かった畑中良輔や竹沢嘉明の目にとまり、No.3 のペルゴレージの「奥様女中」に結びつき、その後モーツァルトの「魔笛」、芥川也寸志の「ヒロシマのオルフェ」などプロのオペラ団の公演が続いた。ハイブリッドオーケストラは、このようにして実験段階からプロが使用する段階へ発展して行く。この「奥様女中」は、8月1日から5日間、マチネーを入れると6回公演され、プロのオペラ団体がハイブリッドオーケストラを本格的に使ったものとして記憶されるべきものである。同時に、ストリングカルテットとエレクトーンとの組み合わせによるハイブリッドスタイルとしても最初のものである。このスタイルはその後、エレクトーンの弦楽器音をあたかも生の弦楽器アンサンブルのように豊かに響かせる方法として、多くの団体が採用するきっかけとなった。

No.4 と 5 は海外の指揮者が関係した事例である。L.リビングストンは当時、USC（南カルフォルニア大学）音楽学部長、E.マッツォーラは、現在ミラノ・スカラ座をはじめオペラを中心に活躍中で、昨年2月には新日本フィルを指揮。彼らは帰国後、アメリカとイタリアでエレクトーンを使ってみたいとの希望があったが、現地でエレクトーンの調達ができずに計画は残念ながら頓挫した経緯がある。

No.6の「魔笛」では、当時の水戸芸術館長であった吉田秀和がその印象を朝日新聞文芸欄に“私はエレクトーンに違和感を抱いていたが、今回の演奏は、なまじの楽団以上の出来栄えであった。もし今回の公演で誰かに賞を出すとしたらエレクトーンの小林由佳さんにあげたい”と述べた。ややもするとエレクトーンについての記事では楽器に関するものが多いが、奏者が称賛を受けたことは注目に値する。

No.7の若杉弘が指揮をした芥川也寸志の被爆者を主人公とした「ヒロシマのオルフェ」は、戦後50年という節目に東京室内歌劇場が公演したものである。畑中良輔はこの年の朝日新聞の「1995年に感動した10のコンサート」の中に、NHKホールでの海外オペラ団公演に伍して客席150席のエレクトーンシティ渋谷で公演されたこのオペラを選んだ。これもエレクトーン関係者にとってうれしいニュースであった。

No.8,9,10 は、熊本音楽短期大学（現、平成音楽大学）と昭和音楽大学における教育現場の事例として今後の教育に参考になるものと思われる。次回は、音楽教育の中でのハイブリッドオーケストラについてレポートしたい。

注－1　全日電研は、全日本電子楽器教育研究会の通称名

（あがた・すぐる　本研究会員）

全日電研関連写真

第１回大会（１９９６、ヤマハホール）

第１回　研究コンサート記録

1986年　８月23日　13:30　ヤマハホール

	《第１部》		
１．二本のトランペットのための協奏曲	Ａ．ビバルディ	El.森下絹代	Tp.祖堅方正、井川明彦
２．キリストの昇天より“天国を希求する魂の清らかなアレルヤ”	Ｏ．メシアン	El.森下絹代	
３．カプリース	Ｅ．ボッツァ	El.森下絹代	Tp.井川明彦
４．プレリュードとフーガ　BWV544	Ｊ．Ｓ．バッハ	El.岩田圭子	
５．オルガンのためのバラード“Miyabi”	有馬礼子	El.松本玲子	
	《第２部》		
６．バンクーバー讃歌	沖　浩一	El.沖　浩一	
７．サロメより“七つのベールの踊り”	Ｒ．シュトラウス	El.仁科　愛	
８．魔菩鷺史（まぼろし）	滝本恭史	El.滝本恭史	
９．ピアノ協奏曲20番より“第１楽章”	Ｗ.Ａ.モーツァルト	El.森下絹代	Pf.藤原嘉文
10．Variations Rhapsodiqueより	Ｈ．オシェック	El.森下絹代	Cl.星野　正　Vc.岩井雅音
		Perc.目黒一則	**Pf.** 藤原嘉文

第２回大会（１９８７、ヤマハホール）

第２回　研究コンサート記録

1987年　８月５日　13:30　ヤマハホール

１．トリオソナタ　変ホ長調　BWV525より	Ｊ．Ｓ．バッハ	El.岩田圭子	
２．Sonate	矢内直行	El.仁科　愛	
３．雲の肖像	一柳　慧	El.松本玲子	
４．椿姫より“ああ、そはかの人か”トロバトーレより“おだやかな夜”	Ｇ．ベルディ	指揮/河地良智	Sop.高橋照美、加藤与志子
		El.西村則子、赤塚博美、大竹くみ、柴田薫	
５．グラナダ	Ａ．ララ	指揮/河地良智	Ten.ウィリアム・ウー
		El.西村則子、赤塚博美	
６．舞衣（まいぎぬ）	菊地雅春	El.赤松紀代子	小鼓/堅田喜三久　大鼓/望月左太郎
７．ヴィシュヌの瞑想Ⅱ	西村　朗	El.柴田　薫	
８．夜想曲より“海の精”	Ｃ．ドビュッシー	El.森下絹代	
９．コンチェルティーノ	Ｊ．カステレーデ	El.森下絹代	Tp.井川明彦　Tb.箱山芳樹

第５回大会（１９９０、こまばエミナース）

1990年　７月18日　14:30　こまばエミナース
《アコースティックvsエレクトーンによる協奏曲》

１．ピアノ協奏曲第１番より“第１楽章”	P.I.チャイコフスキー	指揮/河地良智　Pf.M.パツウッティ El.太田暁子、佐野智美　St.東フィル室内アンサンブル
２．オルガン協奏曲	F．プーランク	指揮/橋口正満　El.伊沢長俊、相馬泉美、林 香織 St.東フィル室内アンサンブル　Perc.上野信一
３．箏協奏曲“The origin”	一柳　慧	指揮/L.リビングストン　箏/石垣清美 El.柴田 薫、西川裕美子、深谷由美子 Perc.上野信一
４．マリンバ協奏曲“ラウダ・コンチェルタータ”	伊福部　昭	指揮/L.リビングストン　Mar.安倍圭子　El.森下絹代

第８回大会（１９９３、こまばエミナース）

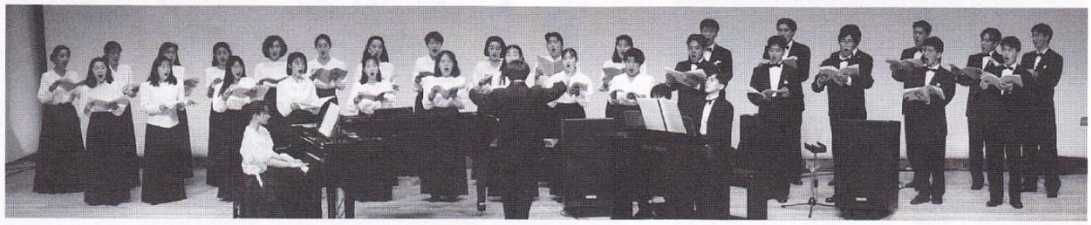
第８回　研究コンサート記録

1993年　８月４日　17:30　こまばエミナース
《第１部　エレクトーンと合唱、管楽器との共生》

１．混声合唱曲「鎮魂」より“樹林”“石”“原子”	阿部加奈子	指揮/夏田昌和　合唱/東京芸大声楽科有志合唱団 El.近藤　岳　Pf.阿部加奈子
２．牧神の午後への前奏曲/小組曲より“バレエ”	C．ドビュッシー	指揮/尾崎晋也　管楽器/洗足学園大学管楽器専攻生 El.梅沢由香、坂井由美子、小林美紀、中里明子

《第２部　委嘱作品》

３．生命の梯子	夏田昌和	El.近藤　岳
４．ヴァイオリンと電子オルガンのための詩曲“焔(ほむら)”	桑原洋明	El.海津幸子　Vl.樋口千稲
５．Watercolour Delusion	石井　淳	El.渡辺睦樹



電子楽器レポート 連載-24

ハイブリッドオーケストラ[注-1]発展３０年の歩み - 2

研究：阿方　俊

ハイブリッドオーケストラ（英語: Hybrid orchestra）とは、電子オルガン（スピーカーから出てくる電子音）と生楽器（楽器本体から音が出てくるアコースティック音）の共生によるひとつの演奏形態を指す。そして、それが少人数のアンサンブルの場合でも人数の大小にかかわらず慣習的にハイブリッドオーケストラという用語が用いられている。それはあたかも、オーケストラと一口にいっても、規模によって、一管編成、三～四管編成、また楽器別のフルートオーケストラやマンドリンオーケストラといったものがあるのと同様なことである。

今、大抵の音楽大学では、時代趨勢としてシンフォニーオーケストラと共に管打楽器によるシンフォニックウィンドオーケストラを擁しているのが普通である。音楽の発展は各時代のハイテク楽器と深い関係があることを考えると、近い将来、ハイブリッドオーケストラが第３のオーケストラとしてフィーチャーされる日が来るのは遠からずという予感を感じる。

ハイブリッドオーケストラの３つの形態

ハイブリッドオーケストラは、以下の３つの形態に分類される。

① 電子オルガンが弦楽器や管楽器の「代用楽器」として用いられるもので、奏者はスコアの担当パートを演奏する。
② 電子オルガンがオーケストラ曲などの「編曲作品」の中で用いられるもので、奏者は電子オルガンパートを演奏する。
③ 電子オルガンやキーボードが「創作作品」の中で生楽器と用いられるもので、奏者は既成のオーケストラ楽器の音色や奏法に捉われない音色で自由に演奏する。

昭和音楽大学　合奏（管分奏）講座

この講座は①の典型的な例である。3～4名のエレクトーン奏者がオーケストラの弦楽器パートを担当し、管打楽器奏者はオーケストラスコアを原曲通りに演奏する。2009年度の日本電子キーボード音楽学会の大会資料によると、次の曲目リストに見られるようなオーケストラ曲を体験している。

- チャイコフスキー　交響曲第４番
- ベートーヴェン　交響曲第６番（田園）
- ラヴェル　ボレロ
- ビゼー　アルルの女　第２組曲
- メンデルスゾーン　交響曲第４番（イタリア）
- プロコフィエフ　ロメオとジュリエット
- ベートーヴェン　レオノーレ序曲　第３番
- ウェーバー　魔弾の射手序曲
- ワーグナー　マイスタージンガー　第１幕への前奏曲
- チャイコフスキー　イタリア奇想曲
- ハチャトリアン　ガイーヌ組曲より抜粋
- ドボルザーク　交響曲第９番（新世界）
- ドリーブ　コッペリア

この中のドリーブのコッペリアは、短大のバレエコース卒業公演で演奏されたが、最近では、電子オルガンの定期演奏会で演奏する機会が増えるなど、講座の域を超えてステージ演奏が定番化しつつある。

またこの動きは、海外にも紹介され日本発の演奏形態として注目を浴びはじめている。

次の写真は、2012年11月、広州国際電子キーボード芸術フェスティバルにおける星海音楽学院の「混合交響楽団」（ハイブリッドオーケストラ）の演奏風景で、曲目はシベ

リウスの「フィンランディア」。

浜松学芸高等学校　定期演奏会

この学校のハイブリッドオーケストラの特長は②に相当し、電子オルガン奏者は「編曲作品」の該当パートを演奏する。①のスコアリーディングによるものと異なり、与えられた曲と奏者に合わせた編曲が必要である。

2012 年度の電子オルガンの定演で取り上げられたモーツァルトのコンサートアリア「誰がわが恋人の苦しみを知ろう」は、下の写真のような楽器編成で、管楽器(Fl.×２、Hrn.×１)、弦楽器（Vl.×1、Cel.×１)、電子オルガン×３、の８名用に編曲されたものであった。(編曲・指揮：宮本賢二朗)

平成音楽大学　コンサート「音　創造！」

平成音楽大学では、前身である熊本音楽短期時代の 1994 年にはじまった電子オルガンコンサートシリーズで①のスタイルのハイブリッドオーケストラが、オーケストラ曲、コンチェルト、ミュージカルなどで大々的に用いられていた経緯がある。その流れは、この連載-22 で紹介した熊本オペラ芸術協会の「魔笛」公演に受け継がれている。

同時にこの大学では、最近の音楽大学を取りまく環境変化に対応する形で、ライブコンサート「音　創造！」シリーズを開催し、次なるステップ③のあり方を追求している。

1 月 31 日、同大学サテライトステージで開催されたコンサートで、講師が関わったスペシャルコーナーを除く 12 作品は、作詞、作曲、編曲、ヴォーカル・楽器演奏、サウンドデザイン、映像を学生が担当していた。ここでは、①と②とは違う形で電子オルガン、電子キーボード、コンピューターが、ヴォーカル、ピアノ、ギター、フルート、オーボエ、アコーディオンなどと共生した独特のライブ演奏の世界を創りあげていた。

確かに、これをハイブリッドオーケストラと呼ぶのにふさわしいのかと疑問が残る。しかしハイブリッド（異種混合）という観点からすると、「代用楽器」「編曲作品」の先にある「創作作品」への流れは自然な動きである。

この新しいジャンルを大学として整理・発信するため、翌日、関係者が集まって「このコンサートのもつ意義と今後を考える」というタイトルのワークショップ（写真上）が開かれ、ハイブリッドオーケストラの次なるステップへの期待と可能性を強く感じた。

（あがた・すぐる　本研究会員）

注－1：この用語は筆者の造語で、昭和音楽大学研究紀要 No.22.2002. 46 p.で最初に言及